

茗溪学園中学校高等学校

うたいたいうたをうたいたい（１）

= ぼくらのコーラス・レシピ =

教務部長 田代 淳一

以前このコラムで紹介しました茗溪学園音楽科制作『合唱スコア ぼくらのコーラス・レシピ うたいたいうたをうたいたい』（ドレミ楽譜出版社）の「2009年コンプリート版」が12月に出版されました。今回は、この本の編集の中心人物でキャラクターでもある「デンチュー先生」と田中潤一先生のコラムを抜粋して紹介します。

茗溪学園音楽科では、授業や行事で合唱されてきた茗溪オリジナル合唱編曲をまとめた曲集『ぼくらのコーラス・レシピ』をドレミ楽譜出版社から出版し、授業や六送会（6年生“＝高校3年生”を送る会）で使ってきました。そして、初版を増補改訂パワーアップした新版『The Complete ぼくらのコーラス・レシピ』が2009年12月に完成しました。定価は本体価格2000円です。

この曲集は、合唱で歌いたい歌があっても合唱編曲譜がない、でも諦めないで自分たちで何とかしよう、と動き始めた30年前の茗溪生たちの動きが原動力になっています。「無ければ生み出す」、それが茗溪スピリット。今回の新版には、29回生（現高校3年生）による“ボヘミアン・ラブソディ”を始めとする新たな曲目が追加され、また宇宙ステーション“きぼう”で流された「ロボットアームで抱きしめて」なども加えた多彩な選曲になっています。編曲・校正・コピーライト・デザインなどにも美術部や写真部の卒業生が関わり、まさに茗溪合唱30年史ドキュメントともいえるこのレシピ集、音楽の面からの茗溪の魅力を感じてください。

以下は、この新版のデンチュー先生のコラムです。

Column 01 “生徒に混ざる、生徒と遊ぶ”

20数年前、音楽大学を卒業してすぐ、つくば市にある創立して間もない中高一貫の私立校に音楽教師としてやってきた。赴任して間もなく、右も左もわからず廊下を歩いていると、ある部屋から楽器をつま弾く妙なる調べが聞こえてくる。音がする方にふらふらと誘い込まれていくのは私の習性。音の主はチャランゴという南米の楽器だった。「これでバンドをやろうと思ってるんですよ」そう答えたのは眼光鋭い高校3年S君。「寮の部屋に遊びにきませんか？」誘われて行かないわけがない。

チャランゴ、ギター、パーカッション、高校生離れた巧みさで彼らは楽器を操っていた。特に目を見張ったのは、巨匠アントニオ・バンターハ氏のグループのチャランゴ弾きルイス・サルトルール氏に可愛がられ、直々に教えを受けたというアルゼンチン帰りの高校2年F君。彼の掻き鳴らすチャランゴからは、楽譜には書き表せない南米独特のリズムが、ものの見事に聞こえてきた。

「先生、フルート吹けるんでしょ？ ケーナやって下さい。」

そりゃあ、穴の開いたもの吹いて音を出すくらいなら朝飯前だけれど……。その場でケーナを渡されると、早速、口伝で曲を教え込まれ、すっかり彼らのペースで文化祭に向けて練習が始まっていた。

その年の文化祭の楽しかったことと言ったらなかった。ケーナを吹き、ギター、チャランゴ掻き鳴らし、太鼓叩いて、歌を歌って、フォルクローレ・バンド“ロス・メンディゴス・デ・インカ【インカの乞食】”は校内狭しと練り歩いた。久しく忘れていた音楽する楽しさが全身に蘇ってきたのを覚えている。一緒に遊んで貰っているのは私の方だった。

これが教師になって初めての生徒との出会いだ。そして「生徒に混ざる」「生徒と遊ぶ」が私の教科書の第1頁となった。



25回生4年生 Joyful Joyfulの合唱にソコを入れて